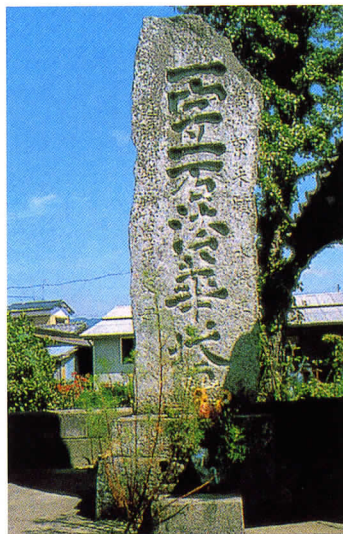


原 采 蘋 — 筑紫路の漢詩人

長崎街道筑前六宿のひとつ、山家宿に「日本唯一閩秀詩人原采蘋塾跡」という石碑があります。幕末の動乱期にあって、生涯の大半を遊歴の中に過ごし、女流三傑の一人と謳われたのが原采蘋です。



◀山家の原采蘋塾跡（撮影・谷 昭佳）



◀山家時代に家族同様の親交のあった芳野曾平父子によって建てられた石碑（撮影・谷 昭佳）

■生涯のあらまし

原采蘋は、寛政10年（1798）に筑前秋月藩の儒者で藩学稽古館の教授でもあった原古処とゆきの長女として秋月に生まれました。

名は猷、号が采蘋で他に霞窓とも称しました。兄と弟がいましたが、2人とも病弱でしたので、古処は才気煥発な采蘋に期待し教育しました。江戸詰めときは常に手紙や書物を送り学問や漢詩を作ることを勧め、諸国を旅する際にも采蘋を同行し各地の文人墨客と交わる機会を与えました。

文政8年（1825）、28歳のとき古処から『不許無名入故城』（名をあげないうちは帰郷を許さないという意味）という一句のある漢詩を贈られ、久留米藩士の養女という形で京に上りました。秋月の藩制では女子が藩外に出るのが困難だったためですが、古処と采蘋の厳しい覚悟が伝わってきます。滞京中に父重病の知らせを受け、帰省しその看病に当たりましたが、古処の没後、遺命を果たす

ため男装帯刀で再び東遊の旅に出ます。

京では頼山陽・梁川星巖、江戸では佐藤一斎・松崎慊堂などに支援と指導を受けました。江戸滞在は20年余におよび、その間二度にわたって母の江戸招請を藩に願い出ましたが、許可されませんでした。

嘉永元年（1848）、51歳の時に、病気の老母のために帰郷してのち母と筑前山家に移り住み私塾を開きました。母の没後に肥前・肥後・薩摩へ遊歴の旅に出ています。

安政6年（1859）、采蘋は山家の住居をひきはらい、宿願である原古処の遺稿を刊行する目的でまた旅に出ます。出版のための資金作りをしながら長州の萩に着いたのち病に倒れました。采蘋は死に臨んで長州藩の勤王家土屋蕭海に悲願を託しましたが、安政の大獄の動乱で古処詩集の出版は成りませんでした。

安政6年10月1日、異郷の地で原采蘋は漢詩一筋の61年の生涯を閉じました。

■山家での生活

原采蘋が私塾を開いた頃の山家宿は、長崎街道と日田街道が交差しており、諸大名が参勤交代に通過する交通の要衝でした。宿場の内外には寺院や医者や有力な農民・商人も多く、書や学問に励む子弟が多数いたことからこの地に塾を開いたものと思われます。

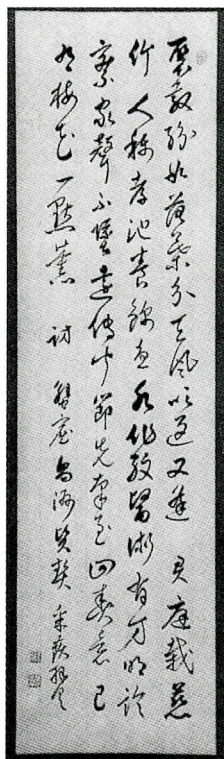
私塾の正式な名称は伝わっていませんが、「宜宜堂」という額が掛かっていたことが井上知愚齋（広瀬淡窓の高弟で咸宜園都講）の詩にみえます。塾の家屋は八畳二間・六畳二間で塾舎と住まいが一緒になっていました。

塾では孝経（孔子が孝道について述べた書）の素読、習字、「小学」「論語」の講義などが主で、母のために布帛（布や絹）を織る傍ら塾生の素読を聞き、怠け者や覚えの悪い者は機道具で叩いて諭し、時には野外で講義をして自然に親しむことも教えたようです。

門弟で傑出していたのは、若年ながら俊才ぶりを発揮した後年の勤王志士戸原如橘でした。塾生では山家西福寺の和田三兄弟、阿志岐圓徳寺の宮崎兄弟もその名を残しています。また、長三洲や河野鉄兜など著名な学者の訪問が多かったのも采蘋塾の特徴でした。

采蘋は開塾当初「女先生」、3年後に「原先生」と呼ばれ、4年目には「学文先生」と

▲山家出身の医者平島伯珉に采蘋が贈った漢詩。右肩に亀井南冥・昭陽・原古処・采蘋と伝わった「東西南北人」の関防印が押印されている。（提供・庄野壽人）



聚散紛如落葉分
庭栽慈竹人稱孝
醫術有才明診察
節先南至回春意

天風吹送又逢君
池養錦魚水作紋
家聲不墮遠伝聞
已有梅花一點薰

訪蟹窟島洲賢契 采蘋拜具

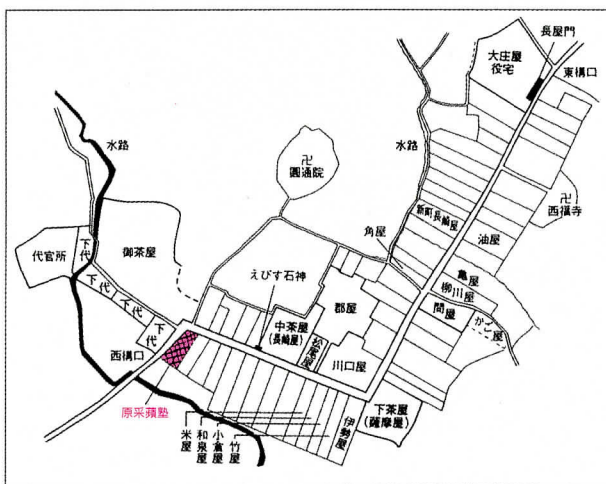
（解説・近藤典二）

尊称されたそうですが、女性が教授するというのがそれほど珍しい時代だったのです。

原采蘋については、「うりざね顔の美人で大女、酒豪で、男装帯刀し一人旅に出、一流の文化人の中でも臆することなく朗吟し、艶聞の噂も多かった」という評が残されていて女傑を思わせます。さらに采蘋が用いていた「東西南北人」という関防印（書画の肩に押す印）にふさわしい自由闊達な精神が作風に息づき、自然や生き物を愛する者の感性が随所にみられます。繊細さと豪放さにくわえて遊び心さえも感じられます。詩人としてだけでなく女性としても人間としても新鮮な魅力にあふれていたであろうと想像させます。

余談ですが、明治22年頃の鹿児島市に「采蘋女学校」という私立の女学校がありました。安政3年の肥薩遊が縁で、原采蘋を女性の一つの理想像として女学校の名称にしたのだとしたら興味深いものがあります。

（吉留優子）



山家宿略図（ちくしの散歩「山家宿(1)」より）